

洛中洛外図屏風「歴博甲本」と「歴博乙本」の人物データベースによる比較

小島道裕・森下佳菜・大藪海

Use of the Character Database for Comparison of Rekihaku A and B Versions of Folding Screens of Scenes in and around Kyoto

KOJIMA Michihito, MORISHITA Kana, OYABU Uni

- ①人物データベース作成の経緯
 - ②「歴博甲本」の人物像と「歴博乙本」の人物像の項目別比較
- まとめ

【論文要旨】

国立歴史民俗博物館が所蔵する二つの初期洛中洛外図屏風「歴博甲本」と「歴博乙本」について、描かれた人物すべて（甲本一四二六人、乙本一七二一人）をデータベース化する作業を終え、横断検索も可能となったため、両者のデータを定量的に比較する形で、その違いについて、特に不明な点が多かった乙本について考察を試みた。

乙本は全体的に甲本よりも簡略化されており、またひとつの場面に、場面と関わる形で特定の種類の人物を集中させる傾向が見られる。生業の種類が少ないことや、僧侶を宗派別に描かないことなど、人物に個性が乏しく、また男性の老人が全く見られないことや尼僧をほとんど描かないなど、偏りもかなり著しい。

しかし、それは単純に甲本よりも質と量が下がったことを意味するのではなく、乙本独自の観点ないし嗜好から選択が行われた結果でもある。尼僧が排除される一方で着飾った女性が目立つし、振売や農民について、野菜を扱った独自の場面が多く見ら

れる。祭祀については、神輿が渡御する祭祀を二つ描き、内裏でも賑やかな三種杖さんしゆぼうの場面を描いており、全体を華やかに仕立てようとする意識が見られる。

このような差は、発注者や絵師の個性でもあろうが、時代差の問題と考えられるものも多く見られる。尼僧が少ないことは、後家尼の地位が下がって、家長として表に出なくなつたためと思われるし、また、兜に「変り兜」的なものが見られることや、幟旗など多様な指物が見られること、髻では「丁髻」に近い髻が多いことなども、甲本よりも時代が下がったことによる近世的な現象と見ることができよう。作品の年代観としては、乙本の年代をおよそ一五八〇年代、豊臣期ころとした従来の推定と本稿での検討結果に違和感はなく、大きな変更は必要ないと思われる。

【キーワード】 洛中洛外図屏風、歴博甲本、歴博乙本、人物画像、データベース

① 人物データベース作成の経緯

(一) 「歴博甲本」・「歴博乙本」の人物データベース作成

国立歴史民俗博物館には、初期洛中洛外図屏風として知られる四つの作品、すなわち「歴博甲本」「東博模本」「上杉本」「歴博乙本」の内、「歴博甲本」と「歴博乙本」の二つが所蔵されている。この二つの作品について、描かれた人物をデータベース化する作業を終え、横断検索も可能となったため、両者を定量的に比較する形で、その違いについて、特に制作年代や発注者をはじめとして不明な点が多い「歴博乙本」について考察を試みたい。

まず、データベース作成の経緯について述べると、以下の様である。「歴博甲本人物データベース」は、国立歴史民俗博物館の共同研究「洛中洛外図屏風『歴博甲本』の総合的研究」(二〇〇九―一一年度、代表小島道裕)の一環として着手した。画中の情報を歴史資料として把握するための手段として検討を行ったもので、描かれた一人一人について、人物の属性や屏風の中における位置などの情報を記述し、画像と文字データを組み合わせたデータベースを作成した。諸説あった総人数も、この作業の結果大幅に増えて、一四二六人と確定した。二〇一二年春の企画展示「都市を描く―京都と江戸―」において、絵を読み解くためのデジタルコンテンツとして用いた後、国立歴史民俗博物館ホームページで、「データベースれきはく」の一つとして公開を続けている。この「歴博甲本人物データベース」については、共同研究の報告書である『国立歴史民俗博物館研究報告』第一八〇集に、人物情報のデータ抽出作業を行った大藪海、およびデータベースの設計を担当した宮田公佳氏が、それぞれについて執筆している(大藪二〇一四、宮田二〇一四)。

「歴博乙本」については、その後行なった人間文化研究機構連携研究「都市風俗と『職人』―日本中近世の絵画資料を中心に―」(二〇一三―一五年度、代表…大高洋司国文学研究資料館教授)において、「歴博甲本」と同じ内容で作成した。その内容については、作業に当たった森下が、項目や入力語などの問題について、本誌第二〇六集に執筆している(森下二〇一七)。公開データベースとしては、二〇一七年一月から稼働している。

(二) 二つのデータベースの統合と例示検索語句の問題

「歴博甲本」「歴博乙本」(以下適宜「甲本」「乙本」)それぞれのすべの登場人物について一通りデータが整った時点で、乙本のデータベースを公開するに際して、甲本のデータベースとどのような関係にするか、という問題が生じた。利用者が検索を行う際の画面(インターフェイス)は、甲本のデータベースでは、企画展示用のコンテンツとして開発した経緯から、文字入力による検索のみでは利用が難しいと判断して、フリーワードによる検索は維持しながら、検索項目毎に代表的なキーワードを例示した選択画面を作り、そちらが優先的に使われることを想定した画面にした(図1)。画面左下の枠でフリーワード検索をすることもできる)。結果は好評であったため、甲本人物データベースに倣って作成した乙本でも同じ画面を作ろうと考えたが、しかしキーワードの例示は、甲本とは異なったものが必要になることがすぐに明らかになった。なぜなら、甲本で例示していた入力語には、乙本には少ししか、または全くないものもかなり存在し、また逆に、乙本には多いのだが、甲本には少ないため例示に出していなかった語もあるからである。そのような差がどのように生じているのかを、まず理解することが必要となった。

検索画面の問題としては、国立歴史民俗博物館のシステム内で、甲本・乙本それぞれのデータを横断して検索することができる見込みとなった

洛中洛外図屏風「歴博甲本」人物データベース
 - 「歴博甲本」に登場する1426人の人物像について、キーワードで情報を検索できます -



1426人の全てを表示						
せいべつ 性別	おとこ 男	おんな 女	こども 子供	あかんぼう 赤ん坊		
みぶんなど 身分等	くげ 公家	ぶし 武士	そうりょ 僧侶	にそう 尼僧	のうみん 農民	いぬじんにん 犬神人
ふくそう 服装	かりぎぬ 狩衣	ひたたれがた 直垂型	かたぎぬばかま 肩衣袴	ほうい 法衣	こそで 小袖	どうぶく 胴服
かぶりもの 被り物	えぼし 烏帽子	あみがさ 編笠	ぬりがさ 塗笠	かぎま 被衣	ぬの 布	ずきん 頭巾
かみがた 髪型	たぶさがみ たぶさ髪	ていはつ 剃髪	すいはつ 垂髪	たばねがみ 束ね髪	ほうはつ 放髪	ほうはつ 蓬髪
ひげ 髭	くちひげ 口髭	あごひげ 顎髭	ほおひげ 頬髭			
もちもの 持ち物	かたな 刀	あぶら 扇	やり 槍	かさ 傘	みくろ 袋	つえ 杖
ばしょ 場所	だいの 内裏	ばくふ 幕府	てい 邸	けいだい 境内	とおり 通	たんぼ 田圃
こうい 行為	あるく 歩く	すわる 座る	みる 見る	まつ 待つ	のむ 飲む	かつぐ 担ぐ
その他	こうほ 後補	ほひつ 補筆	はくめん 白面	さげお 下げ緒	ささき 左隻	うせき 右隻

キーワードを選択すると関連する画像が見られます



図1 「歴博甲本人物データベース」の検索画面

洛中洛外図屏風「歴博甲本・乙本」人物データベース
 - 「歴博甲本」と「歴博乙本」に登場する1426人+1172人の人物像について、キーワードで情報を検索できます -



1426人+1172人の全てを表示							
せいべつ 性別	おとこ 男	おんな 女	こども 子供	あかんぼう 赤ん坊			
みぶんなど 身分等	くげ 公家	ぶし 武士	そうりょ 僧侶	にそう 尼僧	のうみん 農民	いぬじんにん 犬神人	かよちよう 駕輿丁
ふくそう 服装	かりぎぬ 狩衣	ひたたれがた 直垂型	かたぎぬばかま 肩衣袴	ほうい 法衣	こそで 小袖	どうぶく 胴服	つひも 付紐
かぶりもの 被り物	えぼし 烏帽子	あみがさ 編笠	ぬりがさ 塗笠	かぎま 被衣	ぬの 布	ずきん 頭巾	かぶと 兜
かみがた 髪型	たぶさがみ たぶさ髪	ていはつ 剃髪	すいはつ 垂髪	たばねがみ 束ね髪	ほうはつ 放髪	ほうはつ 蓬髪	まげ 髷
ひげ・かんじやく 髭・顔色	くちひげ 口髭	あごひげ 顎髭	ほおひげ 頬髭	はくめん 白面			
もちもの 持ち物	かたな 刀	あぶら 扇	やり 槍	かさ 傘	みくろ 籠	みくろ 袋	つえ 杖
ばしょ 場所	だいの 内裏	ばくふ 幕府	てい 邸	けいだい 境内	とおり 通	たんぼ 田圃	はたけ 畑
こうい 行為	あるく 歩く	すわる 座る	みる 見る	まつ 待つ	のむ 飲む	かつぐ 担ぐ	あがむ 拝む

キーワードを選択すると関連する画像が見られます



図2 「歴博甲本・歴博乙本人物データベース」の検索画面
 キーワードを2列増やしている

ため、インターフェイスも共通のものを作り、同じキーワードからどちらの画像も検索結果として現れ、両者を同時に比較できるような仕組みにした⁽¹⁾。そのため、一つの画面に両方のキーワードを例示する共通の画面に修正した。甲本人物データベースの検索画面と比べると、入力語の

枠を二列追加して、乙本に多い入力語を補っている(図2 甲本・乙本統合検索画面の例示入力語表)。甲本・乙本のいずれかには存在しない語彙も残しているのが、検索すると、甲本・乙本のいずれかがゼロ件のこともありうるが、それもそれぞれの個性ということになる。ただ、甲

本の検索画面にあった「その他」の項目は統合検索画面では削除した。乙本では「後補」や「補筆」が少なく、ひとつの項目とする必要は乏しいと判断したため、検索上重要な意味のある「白面」を「髭」の項目にまとめることで対応している。

本稿は、以上の作業によって気の付いた点をまとめ、両者の対比を試みたものである。

②「歴博甲本」の人物像と「歴博乙本」の人物像の項目別比較

以下、甲本と乙本の人物像について、各項目のデータ比較で見いだした差異を示し、その意味を考察してみたい。両者に差が生じる要因としては、時代の差、および絵の性格の差、具体的には発注者や絵師の違い、という二つが考えられるが、前者の時代差の問題、すなわちそれぞれの作成年代については、甲本は一五二五年（大永五）ころであることがほぼ明らかとなっており、乙本については、正確には決めがたく論者によってやや差もあるが、近世的な風俗が多く見られることから、甲本よりもかなり下がることは間違いなく、およそ一五八〇年代ころ、すなわち六〇年ほどの年代差があると推定される（小島二〇〇八、二〇〇九）。

以下に掲載する各項目のデータをまとめた表は、多くカウントされた順に上から並べられているが、複数の語彙が記述された人物は別にカウントされるため（たとえば「小袖」と「小袖・袴」は別）、一つ一つの語彙ごとの順位にはなっていない。表の左側には便宜的に通し番号を振り、本文では「甲1」「乙1」などと表記した。同数のものがなければ、この番号が順位ということになる。本文で言及したものについては、表に星印（★）を付けている。

（一）身分・職業など〔表1〕

表1（表1-1が甲本、表1-2が乙本）は、何らかの身分的な属性や職業が認められる人物を表にしたものである。絵画資料から身分を特定するのは困難な場合も多いが、服装・持ち物や描かれた場所などから可能な限り推定して記述している。特段の記述をしがたいものは最後に「不明」としてまとめてあり、「合計」がすなわち描かれた人物の総数となる。甲本が一四二六人、乙本が一七二人で、全体の比率で言えば、乙本に描かれた人物数は、甲本の約八二パーセントということになる。

① 従者と主人―路上の人物

「身分・職業」の表で一番多くカウントされているのは、甲本では「従者」の一三六人（甲1）であり、乙本の二二人（乙4）よりはるかに多く、「主人」の六八人（甲3）も乙本の一七人（乙6）よりかなり多い。「主人」の範疇に属するものとしては、「主人（僧侶）」（甲6、二六人）や「主人カ」（甲17、九人）なども別にあるので、実際はさらに差が広がる。これは、甲本が、路上に現れた集団の社会的な関係をよく描いているのが主な原因だろう。たとえば、幕府門前に描かれた公家や武家の行列（図3）や、輿を囲む集団、高位の僧侶に従う僧侶や下男（後掲の図53）、といった集団は、乙本にはほとんど描かれていない。乙本の路上に描かれた人物は二、三人程度の小さな集団や関係性のよくわからないものが多い（図4）。

乙本は全体的に、特定の場面にその場面と関係のある人物を集中して描く傾向があり、場面との関係が希薄な路上の人物などでは性格があいまいになりがちだが、甲本の方は、特定の場面に依存しない路上の人物などでも、個々の人間をより個人的に細かく描き分けていると言える。ただし、表の問題からは離れるが、乙本には甲本には見られない描写も

表1 身分・職業など

表1-1 甲本

1	★	従者	136	52	主人(山伏)	2
2	★	僧侶	69	53	鷹匠	2
3	★	主人	68	54	能役者	2
4	★	犬神人	51	55	★ 振売(かわらけ売)	2
5	★	駕輿丁	27	56	巫女カ	2
6	★	主人(僧侶)	26	57	絵師	1
7	★	尼僧	26	58	河原者	1
8	★	農民	25	59	河原者(犬放)	1
9	★	振売	21	60	行商人	1
10		武士	20	61	下女カ	1
11		小姓	20	62	下男カ	1
12		喝食(稚児)	16	63	下人カ	1
13		巡礼	15	64	従者(公家)	1
14		従者(武士)	13	65	主人(禰宜カ)	1
15	★	物乞い	12	66	主人(武士)	1
16	★	公家	12	67	商人	1
17	★	主人カ	9	68	僧侶(勸進聖)カ	1
18		武士カ	9	69	僧侶(少年僧)	1
19		番匠	6	70	僧侶カ	1
20		従者カ	6	71	竹売り	1
21		従者(僧侶)	6	72	竹売りカ	1
22		白張	5	73	寺男カ	1
23		庭掃き	5	74	取次	1
24		能役者(囃子方)	5	75	尼僧カ	1
25		鉢叩き	5	76	禰宜	1
26		琵琶法師	5	77	禰宜カ	1
27		牛方	4	78	農民カ	1
28		馬方	4	79	囃子	1
29		桂女	4	80	放下師	1
30		高野聖	4	81	辻子君(遊女)	1
31		材木売りカ	4	82	不明	694
32		従者(口取)	4		合計	1426
33		職人(染色)	4			
34		僧侶(勸進聖)	4			
35		立君(遊女)	4			
36		筏師	3			
37	★	犬神人(弦召)	3			
38		鉦叩き	3			
39		小姓カ	3			
40		猿曳(猿回し)	3			
41	★	柴売り	3			
42		主人(公家)	3			
43		能役者(地謡)	3			
44		比丘尼	3			
45		山伏	3			
46		公家カ	3			
47		いたかカ	2			
48		大原女	2			
49		傀儡師(人形遣い)	2			
50		輿舁き	2			
51		薦僧	2			

表1-2 乙本

1	★	犬神人	61
2	★	駕輿丁	39
3	★	武士カ	37
4	★	従者	22
5	★	僧侶	20
6	★	主人	17
7	★	声聞師(大黒)	15
8		武士	12
9	★	公家	10
10	★	農民	9
11		巡礼	7
12		大原女	7
13	★	犬神人(弦召)	6
14		小姓(房)	6
15	★	振売(野菜売り)	6
16	★	振売	5
17		行商人カ	4
18	★	尼僧	3
19		巡礼カ	3
20		高野聖	3
21		庭掃き	3
22		馬方	3
23		鉢叩	3
24		辻子君(遊女)	3
25		喝食(稚児)	2
26		猿曳(猿回し)	2
27		いたかカ	2
28		小姓	2
29		竹売り	2
30		筏師	2
31	★	僧侶(社僧)	2
32		桂女	2
33		鳥刺し	2
34	★	物乞い	2
35		山伏	2
36		禰宜	2
37		地黄煎売りカ	1
38		柴売り	1
39		主人(僧侶)	1
40		立君(遊女)	1
41		物乞いカ	1
42		湯女	1
43		茶屋	1
44		振売カ	1
45		神官カ	1
46		鷹匠カ	1
47		不明	834
		合計	1172



図3 甲本の路上の集団（幕府前の武家の行列） 甲_左_1
※「甲_左_1」は、「甲本左隻第1扇」の意。以下同。



図4 乙本の路上の人物例 乙_右_4

見られ、例えば路上の人物でも、夫婦連れを思わせる男女のペアが描かれている（図4の中央付近他）。一般に日本の中世の絵画では屋外の場面では男女を別に描く傾向があることから、乙本に見られる近世的な要素の一つと言えるだろう。

なお、武士については、服装だけで見分けるのは困難で、幕府や細川

邸などに描かれた武士らしい者を判断している。そのため、絶対数としては必ずしも多くなっていないが、幕府や細川邸の周辺で折烏帽子（侍烏帽子）を着けた者などを「武士カ」としたところ、乙本では上位（乙3）となっており、やはり、特定の場面に関係ある人物を集中して描くという乙本の特徴が出ていると言えよう。

② 犬神人、駕輿

「身分・職業」の項目で、乙本でも多くカウントされたのは「犬神人」(乙1)の六一人であるが、これは、祇園祭礼の場面に多くの人数が描かれており、武装して神輿などを警固する人物を祇園社の犬神人として数えているためである(図5)。甲本も同様で、五一人(甲4)とかなりの人数に上るが、乙本の方がさらに多い。「犬神人(弦召)」も、乙本では六名がカウントされているが(乙13)いずれも祇園祭礼の神輿を先導する集団として描かれたものである(図6(以下の図は論文末に掲載))。柿色衣を着て白い頭巾を被った「弦召」の姿は甲本にも見られるが、祇園祭礼の場面(神輿の後ろ)に二人いる他、細川邸の近くなどで、実際に弦を売る様子も描かれており(図7)、特定の場面に特定の人物を集中させる乙本に対して、個別の人物像

【身分・職業など】 犬神人



図5 乙本・祇園会の神輿を警固する犬神人 乙_右_2

をさまざまな形で描く甲本という両者の描写態度の差が現れている。

神輿を担ぐ「駕輿丁」の人数が、乙本が三九人(乙2)と甲本の二七人(甲5)より多くなっているのも、乙本が祇園祭礼および御霊会(上御霊神社の祭礼)という、神輿のある祭礼を二つも描き、そこに人数をかけていることが影響している。実際の図で見ると、祇園会の駕輿丁は、甲本・乙本ともに白小袖だが(図8・9)、乙本にのみ描かれた御霊会では、駕輿丁は白小袖ではなく色と模様のある普通の小袖袴になっている(図10)。

③ 公家と内裏の情景

特定の場面に特定の人物群を集中して描く乙本の傾向は、公家や内裏の描き方にも表れている。甲本では、公家は一二名がカウントされているが(甲16)、描かれている場所は、内裏、内裏の裏、三条西邸、幕府門前と様々であり、服装も、束帯、衣冠、直衣、直垂と、場面によって描き分けられている(図11~13)。

乙本の公家は一〇人を数えるが(乙9)、二条邸に描かれた主人らしき一人と飛鳥井邸の一人を除くと、すべて内裏の中に描かれている(図14・15)。衣冠の袍は黒と赤の二種類があり、これは官位による違いという実態とも言えるが、乙本には、後述するように禪にも黒と赤があり、編笠に垂らす布も白と赤があるなど、同じ物でも色を描き分け、特に赤色を交せる傾向がある。

内裏の情景について言えば、紫宸殿の庭前で行われている行事は、甲本・乙本共に正月儀礼であるが、甲本が実際は廃れつつある節会の場面ないし年始の拝賀の場面をイメージしていると思われる(近藤二〇一三、藤原二〇一五)のに対して、乙本は中世末期に盛んに行われていた三毬杖であり、描かれている人物も、踊りと囃子を行っている声聞師(大黒)の一行が描かれ(杉山二〇〇九)、計一五名という結果

になっている(乙7)(図16・17)。

④ 僧侶・尼僧

僧侶と尼僧の描き方には、甲本と乙本で顕著な違いが表れている。まず「僧侶」とされたものだけで比較しても、甲本が六九人(甲2)、乙本が二〇人(乙5)と、甲本の方がはるかに多い。服装(法衣)についてはその項で別途述べるが、甲本が宗派の違いを反映した様々なものを描いているのに対して、乙本は、法衣としては「直裰型」とした一般的なタイプのものしかなく、宗派ごとの描き分けは行っていない。

尼僧については、両者の違いはさらに激しい。甲本では尼僧は二人がカウントされており(甲7)、尼寺の尼僧が歩く風景(図18)の他、後家尼と思われる法衣を着た女性が家族と思われる若い女性たちと連れだって外出している場面がしばしば見られるのだが(図19・20)、しかし乙本では、尼僧とカウントできたのはわずか三名である(乙18)。尼門跡である南御所の門前に剃髪した女性らしき人物がいるのがそれ(図21)、描かれた場所から一応尼僧と見なしたが、法衣を着けているわけでもなく、典型的な尼僧の姿となると、全く見られないのである。甲本に見られるような、家族を引き連れた後家尼は全くおらず、傘をさした尼僧もいない。乙本では、それらに代わって、被衣などで着飾った女性の一行が目立ち(図22・23)。また傘についても、甲本では傘を持つ女性は、検索してみると尼僧のみ(五人)だが、乙本では、赤い傘や模様の入った傘を着飾った女性がさす光景が随所に見られる。甲本と乙本の図像を見比べると、先頭に立って一行をリードしていた後家尼が、着飾った女性(服の色は主に赤)に入れ替わっていることが分かる。

乙本が尼僧ないし後家尼に極めて冷淡な態度を取っているのは特徴的であり、発注者や時代差の問題に結びつくと思われる。

⑤ 農民

農民は、順位では、甲本が八位、乙本が一〇位とあまり変わらないが、人数としては、甲本の二五人(甲8)に対して乙本は九人(乙10)とかなり差がある。共に農作業の風景を描いているのだが、甲本の方がはるかに充実しており、季節を追って、施肥、牛耕、田打ち、麦刈り、草取り、振り釣瓶による灌漑、稲束の運搬、と「四季農耕図」的な色彩があるが(図24・30)、乙本は、作業を特定できるのは、田打ち、稲刈り、稲束の運搬くらいで(図31・33)、具体的な作業ではなく畦道を歩いている場面もある(図34)。牛も、甲本・乙本共に水牛のような角のある牛で、中国画由来の粉本によると思われるのだが、甲本の方は鋤を付けて耕している(図25)のに対して、乙本は畦道を歩いているだけで(図35)、やはり乙本は行為があいまいな傾向がある。

ただ、乙本は、大根畑の畦道で、大根を頭に載せた女性二人(図36)および杵を担いだ男性一人を描いており、次の「振売」の項でも述べるが、農業関係で独自の画像となっている。

⑥ 振売

個別の職業については、振売にやや特徴が表れている。甲本は「振売」で二人がカウントされており(甲9)、杵で担いでいる桶や籠の描写から、魚売り、菜売り、油売りなどが認められる。この他にも、柴売り(三人、甲41)や、かわらけ売り(二人、甲55)などが表に記載されている(図37・40)。これらの職種は、いずれも『七十一番職人歌合』に登場することから、直接実態を描いたというよりも、文学作品との親和性が高いと言えるかもしれない。

これに対して乙本の方は、「振売(野菜売り)」六名(乙15)および「振売」五名(乙16)となり、杵や駕籠の中が分かるのは、菜、大根、人参かと思われる赤いものなど、いずれもおそらく野菜であり(図41・44)、

それ以外の商品は特定できなかった。乙本は、先述のように大根と思われる白い根の部分がある野菜の畑も画中に描いており、また、店頭にも大根らしい物が描かれている(図45)。おそらく何らかの現実を背景にしていると思われるが、野菜類に対する関心という、やや意外な面を乙本が見せていることは注目に値し、また生業のとらえ方にかなり偏りがあるとも言えよう。

⑦ 物乞いなど

物乞いは、甲本では一二人を数え(甲15)、かなりの人数が様々な所に、それぞれ個性的に描かれているが、乙本では明瞭なものは二人のみであり(乙34)、場所も、甲本にも描かれている誓願寺の門前で、定型的な表現として描かれたものと思われる。その他、芸能民的な存在も、内裏の声聞師(大黒)を除けば、乙本は甲本より種類が少ない。

(二) 服装 [表2]

① 直衣と狩衣

服装は組み合わせによってさまざまなバリエーションができるため分類が多いが、全体的には乙本の方が少ない。服の種類としても、上位に位置する小袖(甲1、乙1)、肩衣袴(甲2、乙2)、「小袖・袴」(甲4、乙3)などはあまり変わらないが、甲本には見られる狩衣や直衣が乙本にはほとんどない。直衣(甲32)は、甲本には内裏付近に四人が描かれているが、乙本では全く見られない。公家の描写態度の違いに基づくもので、甲本では先述のように公家を様々な場所に多様な服装で描き分けているのに対して、乙本では公家はほぼ内裏の中の衣冠姿に限定される。

狩衣は、甲本では、単に「狩衣」とされたものは一〇人(甲13)、他に「狩衣(浄衣)」三人(甲36)、「狩衣カ」二人(甲51)、「狩衣・浅沓」一人(甲

68)と、計一六人に上り、具体的には、内裏の公家や白張(白丁。白い狩衣の従者)、観世能の演者(地謡)、禰宜(上賀茂社)などがある(図46~49)。これに対し、乙本では「狩衣(浄衣)」が二名のみ(乙43)であるが、これは松尾社の神官なので(図50)、一般の狩衣姿は描かれていないことになる。

② 法衣

さらに大きな違いがあるのは僧侶の描き方であり、甲本はきわめて多様な僧侶の姿を描き分けている。表2-1の「法衣」関係では、甲3、23、27、33、それに甲57~60や甲86~90と、多様な組み合わせがうかがえる。

具体的に写真で見ると、まず甲本の法衣は直裰型と素絹型があり(図51~54)、それぞれに帽子、袈裟、沓などが付属する。第三位(甲3)となっている単純な直裰型の例としては、図51の百万遍知恩寺門前や、図52の黒谷(金戒光明寺)門前の例があり(後者は僧帽を被っているが、被り物は別の項目なので、この表では区別されていない)、共に浄土宗の僧である。また、甲88で「法衣(直裰型・緋袈裟・鼻高沓(法堂沓)」とされているのは図53であり、大徳寺の境内にもほぼ同じ画像の僧がいるので、禅宗の高僧と考えられる。甲58の「法衣(素絹型、僧綱襟・袈裟)」は図54で、場所は妙覚寺であるから、法華宗の僧を表していることが分かる。

このように、甲本は宗派の別と身分の別を意識して描き分けているが、これに対して乙本の方は、法衣は基本的に直裰型しかなく、先に見た妙覚寺の例でも、図55のように、法華宗的な特徴的な表現は全く行われておらず、単に僧侶であることを示すのみのワンパターン化した描写になっている。

乙本の僧侶の画像に見られる多少の変化としては、作業(剃髪)中の

表2 服装

表2-1 甲本

1	★ 小袖	606	51	★ 狩衣カ	2
2	★ 肩衣袴	126	52	小袖 (両肌脱ぎ)・脚絆	2
3	★ 法衣 (直裾型)	105	53	小袖・葛袴・鴨沓	2
4	★ 小袖・袴	101	54	小袖・脚絆・腰蓑	2
5	小袖・脚絆	57	55	小袖・袴 (大口)・胴服	2
6	直垂型	51	56	直垂型・脚絆	2
7	小袖・胴服	51	57	★ 法衣 (素絹型)・袈裟	2
8	鎧・脚絆	30	58	★ 法衣 (素絹型, 僧綱襟)・袈裟	2
9	付紐の小袖	24	59	★ 法衣 (直裾型)・緋袈裟	2
10	鎧	21	60	★ 法衣 (白直裾)・覆面	2
11	小袖・前掛け	18	61	衣冠カ	1
12	小袖カ	13	62	汚れた布を被る	1
13	★ 狩衣	10	63	★ 肩衣袴 (返股立)	1
14	(不明)	9	64	鎧カ	1
15	小袖・脚絆・蓑	8	65	合羽・小袖・股引・脚絆	1
16	小袖 (腰に絡げる)・禪	8	66	腰布・脚絆	1
17	小袖・笄摺・脚絆	8	67	腰布カ	1
18	小袖・笄摺・脚絆・腰当	7	68	★ 狩衣・浅沓	1
19	腰布	6	69	小袖 (下に鎧を着ける)・脚絆	1
20	小袖 (両肌脱ぎ, 腰に絡げる)・禪	6	70	小袖 (半裸)	1
21	小袖・禪	6	71	小袖 (片肌脱ぎ, 腰に絡げる)・禪	1
22	小袖・袴・脚絆・足袋	6	72	小袖 (両肌脱ぎ, 腰に絡げる)	1
23	★ 法衣 (直裾型)・襟巻	6	73	小袖 (両肌脱ぎ, 腰に絡げるカ)	1
24	小袖 (両肌脱ぎ)	5	74	小袖・ちゃんちゃんこ	1
25	水干・袴	5	75	小袖・肩衣	1
26	白張	5	76	小袖・袴・脚絆・腰当	1
27	★ 法衣 (直裾型)・脚絆	5	77	小袖・袴・行膝	1
28	十徳・脚絆	4	78	小袖・股引・脚絆	1
29	小袖 (片肌脱ぎ)	4	79	小袖・前掛け・太帯	1
30	小袖・羽織	4	80	小袖・前掛けカ	1
31	小袖・脚絆・腰当	4	81	小袖・太帯	1
32	★ 直衣・浅沓	4	82	小袖・打掛	1
33	★ 法衣 (直裾型)・袈裟	4	83	束帯	1
34	★ 禪	4	84	直垂型カ	1
35	柿色の衣	3	85	布袴・浅沓	1
36	★ 狩衣 (浄衣)	3	86	★ 法衣 (直裾型)・掛絡・脚絆	1
37	十徳	3	87	★ 法衣 (直裾型)・緋袈裟・脚絆	1
38	小袖 (腰に絡げる)	3	88	★ 法衣 (直裾型)・緋袈裟・鼻高履 (法堂沓)	1
39	小袖・袴・脚絆	3	89	★ 法衣 (直裾型)・覆面	1
40	小袖・袴・胴服	3	90	★ 法衣 (直裾型)カ・脚絆	1
41	小袖・袴カ	3		合計	1426
42	小袖・腰当	3			
43	小袖・腰蓑	3			
44	小袖・蓑	3			
45	小袖カ・脚絆	3			
46	直垂型・行膝	3			
47	付紐の小袖カ	3			
48	(見えず)	2			
49	肩衣袴カ	2			
50	腰布・腰当	2			

表2-2 乙本

1	★ 小袖	505	41	肩衣袴カ	2
2	★ 肩衣袴	117	42	腰布	2
3	★ 小袖・袴	100	43	★ 狩衣(浄衣)	2
4	小袖カ	61	44	小袖(両肌脱ぎ)	2
5	直垂型	48	45	小袖・腰当	2
6	鎧・脚絆	29	46	小袖(片肌脱ぎ)	2
7	小袖(袖をまくって腕を出す)	27	47	小袖・脚絆・腰当カ	2
8	直垂型カ	22	48	小袖・袴・胴服	2
9	小袖・脚絆	21	49	(不明)	1
10	小袖・前掛	20	50	肩衣袴(片肌脱ぎ)	1
11	小袖・胴服	16	51	肩衣袴カ(片肌脱ぎ)	1
12	鎧	16	52	小袖(肩から布を掛ける)	1
13	★ 禪	15	53	小袖・袴(片肌脱ぎ)	1
14	★ 法衣(直裾型)	15	54	小袖カ・脚絆カ	1
15	★ 肩衣袴(返股立)	12	55	白衣(袖をまくって腕を出す)カ	1
16	小袖(袖をまくって腕を出す、禪が見える)	9	56	鎧・脚絆カ	1
17	小袖・袴カ	9	57	袍カ(盤領の中国風の衣装)	1
18	小袖・腰褌・脚絆	7	58	小袖(片肌脱ぎ)・脚絆	1
19	(見えず)	6	59	小袖(両肌脱ぎ)・脚絆	1
20	小袖・笄摺	6	60	小袖・前掛カ	1
21	柿色の衣・脚絆	6	61	十徳	1
22	小袖・袴(返股立)	6	62	小袖・脚絆・覆面	1
23	小袖(袖をまくって腕を出す)・脚絆	5	63	肩衣袴(返股立)・脚絆	1
24	直垂型(返股立)・腰当	5	64	小袖・胴服・脚絆	1
25	小袖(付紐)	5	65	小袖・袴(返股立)カ	1
26	小袖・羽織	4	66	小袖・袴・胴服・脚絆	1
27	小袖・袴(返股立)・脚絆	4	67	小袖・袴・脚絆	1
28	(身に着けず)	3	68	小袖(袖をまくって腕を出す)・前掛け	1
29	小袖・腰褌	3	69	小袖カ・笄摺カ	1
30	小袖・袴・胴服	3	70	小袖・笄摺・腰当	1
31	直垂型(返股立)・腰当カ	3	71	小袖・袴・脚絆	1
32	布袴	3	72	小袖・脚絆・腰当	1
33	布袴・浅沓	3	73	小袖・袴・羽織	1
34	小袖・袴(大口)・胴服・脚絆	3		合 計	1172
35	肩衣袴(返股立カ)	3			
36	法衣カ	3			
37	小袖(禪が見える)	2			
38	直垂型(返股立)・結袈裟	2			
39	布袴カ	2			
40	★ 法衣(直裾型)・覆面	2			

白衣のもの他、図56(百万遍)の例のように、灰色の衣服を着た僧が従っていたり、あるいは図57のように前を歩く僧が頭巾を被っている、といった例があるが、これは並んで歩く二人の身分や年齢の差を表したものと
思われ、路上を歩く男性に、大人と年少者という組み合わせがよく見られることと軌を一にした表現と考えられよう。

なお、乙本にも例外的に特徴的な服装をした僧侶があり、図58の内裏付近を歩く二人は、直綴型の法衣に加えて塗笠・覆面という変わった格好に描かれている(表では乙40)。甲本にも、白い直綴に塗笠・覆面の人物が二人いるので(図59)、同様の存在かと思われるが、甲本の描写は、『七十一番職人歌合』に見られる「いたか」に似ているので、あるいはそれを表しているのかもしれない。この他、茶色の衣と白い袴を着た北野社の社僧(図60)は、甲本にも一名描かれているが、乙本にも二名が描かれている。

③ 禪

乙本に多く甲本に少ない衣服としては禪ふんとしがあり、甲本が四人(甲34)であるのに対して、乙本は一人(乙13)となっている。描かれた場所は、共に左隻の一条風呂と右隻の鴨川で泳ぐ場面であって共通しているのだが(図61～64)、乙本の方が、同じ場面に同じような人物像を集中的に描く傾向があるため、人数の差となって現れている。なお、乙本の図63・64は赤禪である。

④ 返股立

この他、「返股立かえしももち」も、甲本より乙本の方が多い。甲本では、右隻4扇下の主人の後ろを歩く肩衣袴の太刀持ち一人のみである(図65)。これに対し乙本では、「肩衣袴・返股立」の二人(乙15)を始めとして計三〇人を数え、祭礼に参加している小袖袴の男性や、直垂姿の山伏な

ど、袴をたくし上げている人物の多くに返股立が認められる(図66～69)。返股立は一般的には警固の武士の装束とされるが、あるいは乙本の作者は必要以上にさまざまな所に描いているのかもしれない。

(三) 被り物〔表3〕

① 編笠と被衣

被り物の上位を見ると、「無」つまり露頭が過半で、被り物の種類としては、編笠、被衣、頭巾、折烏帽子、頭巾と、一般的なものの種類には大きな違いはない。しかし順位には差があり、編み笠の両脇に布を垂らした女性は、甲本では「無」を除けば五番目の三六人(甲6)だが、乙本では、編笠の両脇に布を垂らした女性が八三人と最も多い(乙2)。図像としては、甲本では布を単純に両側に垂らしたものだけが(図70～72)乙本では、笠の下で一度輪を作ったものと二種類になっており(図73・74)、また布が赤いものもある(図75)。なお、甲本の図72は、風流踊の早乙女姿で、後述するように口髭があるので男性の女装である(平野 一九九二)。編笠と垂らした布が女性の、口髭が男性のシンボルとして使われている。

しかし甲本では、女性の描き方としては被衣の方が、九二人(甲3)とずっと多い。乙本も被衣は五人(乙4)と多いが順位は編笠より下がる。なお、澤田和人氏のご教示によれば、乙本の被衣は近世的な藍染めのものが多く、甲本の被衣が小袖と変わらない色使いで描かれていることとは違いがある。

② 折烏帽子と冠

男性では、折烏帽子は、甲本の四一人(甲5)に対して、乙本は六〇人(乙3)と乙本の方が多い。甲本では、幕府や細川邸(図76)の他、乙本にはない観世能の能舞台の地謡や囃子方にも描かれており(図77)、また

表3 被り物

表3-1 甲本

1	★ 無	810
2	★ 編笠	202
3	★ 被衣	92
4	★ 頭巾	62
5	★ 折烏帽子	41
6	★ 編笠(布を垂らす)	36
7	(見えず)	29
8	★ 僧帽	18
9	塗笠	16
10	立烏帽子	16
11	風折烏帽子	15
12	★ 兜	14
13	(不明)	12
14	市女笠・被衣	10
15	菱烏帽子	5
16	兜巾	5
17	市女笠	5
18	鉢巻	4
19	白布(桂包)	4
20	笠(組笠)	3
21	風折烏帽子(赤い懸紐)	3
22	帽子	3
23	無カ	3
24	★ 藁帽子	3
25	(裏頭)	2
26	★ 冠	2
27	★ 赤熊	2
28	頭巾カ	2
29	冠カ	1
30	高野笠	1
31	市女笠・頭巾	1
32	折烏帽子(長小結烏帽子)	1
33	塗笠カ	1
34	編笠カ	1
35	立烏帽子カ	1
合 計		1426

表3-2 乙本

1	★ 無	788
2	★ 編笠(布を垂らす)	83
3	★ 折烏帽子	60
4	★ 被衣	51
5	★ 編笠	41
6	★ 頭巾	26
7	★ 兜	18
8	(不明)	16
9	折烏帽子カ	10
10	★ 冠	8
11	(見えず)	7
12	(布を垂らす)	7
13	頭巾カ	5
14	立烏帽子	5
15	★ 兜巾カ・赤熊	5
16	兜カ	4
17	鉢巻	4
18	★ 帽子・赤熊	4
19	★ 兜・黒熊	4
20	編笠カ	3
21	兜巾	3
22	帽子	3
23	黒熊カ	3
24	風折烏帽子・赤熊	2
25	塗笠・覆面	2
26	頭巾・鉢巻	2
27	白布(桂包)	2
28	覆面・赤熊	1
29	兜・赤熊	1
30	頭巾・黒熊カ	1
31	兜・黒熊カ	1
32	唐冠	1
33	折烏帽子(長小結烏帽子)	1
合 計		1172

振売の「かわらけ売」も折烏帽子を被っているのは、職人の古典的な姿と言えよう(図78)。乙本は、数は甲本より多いのだが、内裏の大黒や、幕府・細川邸にいる武士や、内裏三毬杖場面の声聞師、祇園祭礼の犬神人として集中的に描かれており、やはり同じ場所に特定の人物像を多数描く傾向がある(図79～81)。

冠は、甲本が二人(甲26)であるのに対して、乙本は八人と多く(乙10)、これは先述のように、内裏に衣冠姿の公家を集中的に描いているためである。

③ 赤熊・黒熊と兜

乙本に多いものに、赤熊・黒熊がある(乙15、18、19など)。これは、祇園会や御霊神事の場面で兜や帽子に付けられているもので、甲本では風流踊の二人に見られるのみ(甲27)であるが(図82)、乙本では祭礼の場面に、兜巾状のものや帽子と共に、あるいは単体で頭の飾りとされ(図83～85)また兜と共に用いられている(図90・91)。

兜は、甲本は一四人(甲12)、乙本は一八人(乙7)と、表では乙本の方がやや多い程度だが、図像で比べると形状にかなり差がある。甲本では、黒い毛でできた「兜蓑」を兜に被せたものは目に付くものの、兜自体の形状にはあまり変化がない(図86・87)。これに対し乙本では、頭が尖ったものや大きな角が付いたもの、黒熊や赤熊が付いたものなど、いわゆる「変り兜」と見なせるものが見られる(図88～91)。「変り兜」は、戦国末期から織豊期・江戸時代前期ころに発達したとされ、甲本はまだその前段階、乙本はすでにその段階にいった段階と見なすことができる。時代の差が表れていると考えてよいであろう⁽⁴⁾。

この他、先に触れた僧帽(甲8、一八人)は、甲本では浄土宗や禅宗の僧侶に認められるが(図52・53)、先述のように乙本では僧侶の姿がワンパターン化しているので描かれていない。甲本で子供が三人被って

いる藁帽子のようなもの(甲24)も乙本にはない。

(四) 髪形〔表4〕

髪形は、頭の部分がよく見えない人物を除くと、甲本・乙本共に単純に結わえた「たぶさ髪」が最も多いが(甲2、乙1)、乙本ではその次に多い「二つ折り鬘」(乙3、一〇八人)(図92)は、甲本では一四人(甲13)とずっと少ない。この他に、ややはつきりしない「二つ折り鬘」でも、乙本は二八人(乙9)、甲本は一一人(甲16)と乙本が多い。これはおそらく時代の差で、いわゆる「チョンマゲ」に近い形の鬘が、より近世的な乙本に多く見られるということだろう。

乙本では短髪も甲本(甲26、一人)より多いが(乙19、四人+乙12「短髪カ」一三人)、これは若い男性に多い、鬘がない単純な描き方で、あまり明瞭に描いていないだけかもしれない。「蓬髪」は甲本が一四人(甲14)、乙本が二人(乙22)だが、これは物乞いの髪形であり、乙本には物乞い自体が少ないことが反映している。

(五) 髭〔表5〕

髭は、共に「無」が第一位だが、あるものについてははつきりした差があり、甲本は口髭が多く、乙本は顎髭が多い(乙2など)(図93)。複数の髭を持つ場合も多いが、口髭だけなのは、甲本では二五二人(甲2)に対して乙本は二五人(乙5)、顎髭のみは、甲本が五人だけ(甲10)なのに対して、乙本は四七人(乙2)となる。甲本では、風流踊りの場面で男性が女装していることを表すのに口髭を描いていることから(前掲図72)、口髭を男性に一般的なものとしていることがうかがえるが、乙本が顎髭優位なのは何故なのか、必ずしも時代差ではなく画家の個性かもしれないが、とりあえず現象のみを指摘しておきたい。

表4 髪型

表4-1 甲本

1	(見えず)	452
2	★ たぶさ髪	383
3	剃髪	90
4	垂髪カ	73
5	丸髷	63
6	たぶさ髪カ	57
7	束ね髪	56
8	(不明)	56
9	剃髪カ	51
10	垂髪	22
11	★ 放髪	16
12	双髷(双鬘)	15
13	★ 二つ折り髷	14
14	★ 蓬髪	14
15	前髪のみ	12
16	★ 二つ折り髷カ	11
17	束ね髪カ	9
18	銀杏前髪	8
19	丸髷カ	8
20	放髪カ	4
21	(結わず)	3
22	銀杏前髪カ	3
23	放髪(棒状の髷を結う)	1
24	放髪(頭頂部を結う)	1
25	切髪	1
26	★ 短髪	1
27	丁髷	1
28	双髷(双鬘)カ	1
合計		1426

表4-2 乙本

1	★ たぶさ髪	337
2	(見えず)	314
3	★ 二つ折り髷	108
4	たぶさ髪カ	82
5	丸髷	62
6	垂髪カ	54
7	★ 放髪	34
8	剃髪	31
9	★ 二つ折り髷カ	28
10	不明	19
11	放髪カ	14
12	★ 短髪カ	13
13	(結わず)	12
14	束ね髪	12
15	束ね髪カ	11
16	丸髷カ	10
17	垂髪	8
18	前髪のみ	6
19	★ 短髪	4
20	双髷	2
21	剃髪カ	2
22	★ 蓬髪	2
23	銀杏前髪	2
24	双髷カ	1
25	前髪のみカ	1
26	唐子カ	1
27	(見えず、たぶさ髪カ)	1
28	(見えず、丸髷カ)	1
合計		1172

表5 髭

表5-1 甲本

1	無	997
2	★ 有(口髭)	252
3	(不明)	59
4	(見えず)	37
5	★ 有(口髭・顎髭)	28
6	有(口髭・顎髭・頬髭)	15
7	有(口髭)カ	15
8	無カ	8
9	有(頬髭)	6
10	★ 有(顎髭)	5
11	有(口髭・頬髭)	2
12	有(顎髭カ)	1
13	有(頬髭)カ	1
合計		1426

表5-2 乙本

1	無	938
2	★ 有(顎髭)	47
3	(不明)	45
4	★ 有(顎髭・頬髭)	33
5	★ 有(口髭)	25
6	有(口髭・顎髭)	24
7	有(頬髭)	19
8	有(顎髭)カ	13
9	(見えず)	8
10	有(口髭・顎髭・頬髭)	7
11	有(口髭)カ	5
12	有(頬髭)カ	4
13	有(口髭・頬髭)	2
14	有(顎髭・頬髭)カ	2
合計		1172

(六) 持ち物〔表6・7〕

持ち物は多岐にわたり、組み合わせも非常に多くなるため、一人のものには表では省略している。身分や生業に関わる問題も多く、ここで全面的に考察することはできないが、気付いた点を多少述べたい。

表では、甲乙共に「無」が一位で、乙本では「見えず」も多いが(乙3)、描かれた物では、刀、扇、傘などが上位に来る。

① 槍

特徴のあるものをいくつか挙げると、甲本では槍が目立ち、また種類としても、単純な「槍」の他、「十文字槍」、刃が直角に曲がった「鎌槍」があり(甲7、8、20)、表以外でも「片鎌槍」がある。乙本では「十文字槍」が四人(乙17)、「刀・槍」が二人(乙54)のみである。表では総数が現れにくいため、「槍」でそれぞれ全データに検索をかけてみると、甲本は六三件、乙本は九件となり、乙本はかなり少ない。大部分は主人に従う警護の人物が持つものであるため、先述のように、甲本では武士や公家の行列のような社会的背景を持つ集団をよく描くのに対して、乙本ではそれをあまり描かないことが一因と思われる、祇園会その他の場面でも、甲本では警護のために槍を持っている人間が多い。何らかの背景があるかは未詳だが、両者の個性にはなっている。

② 摺り籠と笹

甲本では摺り籠(すりかご)(八人、甲16)、乙本では笹(ささ)(八人、乙11)が比較的上位に来ているが、それぞれ他方にはほとんど描かれていない。これは、甲本には風流踊りで男が早乙女の田植への所作をしている場面があるが(前掲図72)、乙本にはこの場面がなく、乙本には内裏の三穂杖で囃し手が笹を持っていたり、また御霊会の場面でも笹を手にした人物がいるが

(図94・95)、共に甲本にはないことによる。対象とする祭礼行事の違いによる差である。

③ 指物

指物は、祇園会・御霊会の場面に描かれており、乙本は表に乙26の三人乙56の二人がある他、「指物」で検索すると全体では計二十九人になるが、甲本では表には現れておらず、検索してみると計七人である。種類としても、甲本では、「撓(しな)」と呼ばれる湾曲した形の指物のみだが(図96・97)、乙本では、撓(図98・99)の他に幟(のぼり)が見られ(図100・101)、また、羽状のものや、小旗(招(まねき))を集めたような複雑な形状の指物も描かれている(図102・103)。先ほどの「変り兜」と同様、甲冑姿の時に目立つ工夫が進んできたと言えよう。乙本では、指物はすべてが甲冑に伴うものではなく、甲冑を着けずに背中に背負っている人物も散見され、また指物を背中に付けるための指筒(さしづつ)(受筒(うけづつ))も明瞭に描いており、指物への関心の高さがうかがえる。なお、「歴博甲本人物データベース」の段階ではすべて「旗指物」としていたが、乙本では多様な指物があるため、入力語に「指物」も用いている。⁽⁶⁾

④ 杖

杖も差が出ている持ち物で、甲本は「杖」(甲12)の一人の他、計一九件に上るが、乙本では乙76の薦と共に持つ二人(革堂境内)と老女三人の計五人と少ない。甲本では、老人、琵琶法師、荷物を背負った人物などが持っているものだが、乙本には、これらの人物が少ないか、またはいないためである。全体に老人が少ないのは乙本のひとつの特徴であり、男性の老人は全く見当たらず、年齢別で見てもかなり偏った結果になる。乙本には琵琶法師も描かれていない。

荷物を背負った人物については、表で言えば、甲本には「蓑をかけた

表 6 持ち物

表 6-1 甲本

1	無	596	51	刀・弓・空穂	3
2	★ 刀	188	52	刀・猿・餌袋・猿曳(猿回し)の道具	3
3	★ 刀・扇	31	53	鳥籠	3
4	★ 扇	25	54	長刀	3
5	★ 傘	22	55	★ 太刀・十文字槍	3
6	刀(鞘に模様)	16	56	太刀	3
7	★ 刀・槍	15	57	薦・杖・火打袋カ	3
8	★ 刀・十文字槍	15	58	数珠・杖	3
9	刀・長刀	14	59	数珠	3
10	杓・桶	14	60	鉦鼓・撞木	3
11	刀・傘	12	61	鋤	3
12	★ 杖	11	62	荷(頭上に載せる)	3
13	★ 刀・太刀	11	63	(見えず)	2
14	(不明)	10	64	稲束	2
15	団扇	9	65	弓・矢(引目、腰に差す)	2
16	★ 摺り籠(すりささら)	8	66	魚	2
17	鋤	7	67	魚を載せた折敷	2
18	袋(背負う)	7	68	弦(腰に提げる)	2
19	御幣状のもの	6	69	尺八・薦	2
20	★ 刀・鎌槍	6	70	杖・蓑をかけた荷(背負う)	2
21	鞭	6	71	薪(大原木、頭上に載せる)	2
22	風呂敷包み(頭上に載せる)	6	72	摺り籠(すりささら)カ	2
23	無カ	5	73	銭カ	2
24	横笛	5	74	槍カ	2
25	薦・杖	5	75	★ 太刀・鎌槍	2
26	杓・樽	5	76	太刀・槍	2
27	箒	5	77	袋	2
28	桶	5	78	刀・槍カ(立て掛ける)	2
29	★ 蓑をかけた荷(背負う)	5	79	刀・太刀(鞘に模様)	2
30	★ 熊手	4	80	刀・太刀・十文字槍	2
31	鼓	4	81	刀・太刀・長刀	2
32	刀・太刀・槍	4	82	刀・鷹(手に据える)・餌籠カ	2
33	刀・編笠(手に持つ)	4	83	刀・編笠(足元に置く)	2
34	刀・袋(背負う)	4	84	刀・捕網	2
35	刀・編笠(背負う)	4	85	刀カ	2
36	杓・籠	4	86	湯飲み	2
37	桶(頭上に載せる)	4	87	瓢箪・笹竹(茶筌を数個付ける)	2
38	杓・荷	4	88	柄杓	2
39	柴の束(頭上に載せる)	4	89	米俵(背負う)・杖	2
40	叉手カ	4	90	木材	2
41	杓・柴の束	4	91	撥	2
42	竿	4	92	杓・柴	2
43	米俵(背負う)	4	93	杓・風呂敷包み	2
44	羯鼓(腰に付ける)	3	94	杓・櫃・風呂敷包み	2
45	棹	3	95	杓・籠・かわらけ	2
46	杓・稲束	3	96	籠(頭上に載せる)	2
47	風呂敷包み(背負う)	3	97	1件のもの	175
48	刀・矢(引目、腰に差す)	3		合 計	1426
49	刀・太刀・団扇(腰に差す)	3			
50	刀・弓・鞆	3			

表6-2 乙本

1	無	558	46	太刀カ	2
2	★ 刀	173	47	折敷(黒塗)・朱塗の箱(頭上に載せる)	2
3	(見えず)	68	48	折敷(朱塗)・器(黒塗)カ	2
4	★ 刀カ	16	49	棒状の先端に紐を巻き付けたようなもの	2
5	★ 扇	13	50	弓・矢	2
6	傘	10	51	弓	2
7	刀・扇	9	52	杵・櫃	2
8	(不明)	9	53	刀・太刀カ	2
9	杵・籠	8	54	★ 刀・槍	2
10	鋏	8	55	刀カ・太刀カ	2
11	★ 篋	8	56	★ 指物(幟, 一本, 白)	2
12	刀(金色カ)・太刀(鞘に模様)	4	57	★ 刀・太刀	2
13	刀・太刀(鞘に模様)	4	58	団扇	2
14	太刀(鞘に模様)	4	59	刀・猿・猿曳(猿回し)の道具	2
15	太刀	4	60	網	2
16	横笛	4	61	大根(頭上に載せる)	2
17	★ 十文字槍	4	62	袋(背負う)・杖カ	2
18	薪(大原木を頭上に載せる)	4	63	丸盆(朱塗)	2
19	刀(立て掛ける)	4	64	杵・稲束	2
20	鞭	4	65	竹	2
21	羯鼓(腰に付ける)・撥	4	66	油単で包まれた笈(背負う)	2
22	折敷(黒塗)・朱色のもの(頭上に載せる)	4	67	長刀	2
23	杵・荷	4	68	布をかけた荷(千駄櫃)(背負う)・刀	2
24	刀(鞘に模様)	3	69	荷(背負う), 千駄櫃カ	2
25	刀(金色)・太刀(鞘に模様)	3	70	風呂敷包み(頭上に載せる)	2
26	★ 刀(鞘に模様)・太刀(鞘に模様)・旗指物(二本, 赤)	3	71	籠・人參カ	2
27	刀(鞘に模様)・太刀(鞘に模様)・棒	3	72	劍鉾	2
28	扇・刀(鞘に模様)	3	73	柄杓	2
29	刀・傘	3	74	棒のようなものカ	2
30	魚籠・笮	3	75	木刀	2
31	杵・柴の束	3	76	★ 薦・杖	2
32	竹棹カ・叉手網カ・魚籠	3	77	籠(頭上に載せる), 葉物野菜カ	2
33	袋(背負う)	3	78	棹	2
34	木太刀	3	79	傘・篋	2
35	箒	3	80	篋竹(茶筌を数個付ける)	2
36	刀・数珠	3	81	1件のもの	110
37	柴の束(頭上に載せる)	3		合計	1172
38	刀・長刀	3			
39	荷(頭上に載せる)	3			
40	桶	3			
41	米俵(背負う)	3			
42	撥カ	3			
43	御幣状のもの	3			
44	刀(金色)・太刀(鞘に模様)・団扇(腰に差す)	2			
45	刀(朱鞘)・太刀(朱鞘に模様)	2			

表7 鞘の装飾表現

表7-1 甲本

1	刀(鞘に模様)	16
2	刀・太刀(鞘に模様)	2
3	刀(鞘に模様)・鳥籠(鶯)	1
4	刀(鞘に模様)・太刀(鞘に模様)	1
5	刀(鞘金色)・太刀(鞘に模様)・団扇(腰に差す)	1
6	刀(鞘に模様)・太刀(鞘に模様)・旗指物(二本, 赤)	1
7	刀(鞘に模様)・太刀・旗指物(二本, 白)	1
8	刀(鞘に模様)・弓を入れた筒・空穂	1
合計		24

表7-2 乙本

1	刀(金色カ)・太刀(鞘に模様)	4
2	刀・太刀(鞘に模様)	4
3	太刀(鞘に模様)	4
4	刀(鞘に模様)	3
5	刀(金色)・太刀(鞘に模様)	3
6	刀(鞘に模様)・太刀(鞘に模様)・旗指物(二本, 赤)	3
7	刀(鞘に模様)・太刀(鞘に模様)・棒	3
8	扇・刀(鞘に模様)	3
9	刀(金色)・太刀(鞘に模様)・団扇(腰に差す)	2
10	刀(朱鞘)・太刀(朱鞘に模様)	2
11	刀・太刀(鞘に模様)・団扇	1
12	刀(鞘に模様)・太刀(鞘に模様)・槍(柄に模様)	1
13	刀(鞘に模様)・太刀(鞘に模様)	1
14	刀(鞘に模様)・太刀(鞘に模様)・旗指物(二本, 白)	1
15	刀(鞘に模様)・太刀(鞘に模様)・団扇(腰に差す)	1
16	刀(鞘に模様カ)・太刀(鞘に模様)	1
17	刀(鞘に模様カ)・太刀(鞘に模様カ)・棒	1
18	刀・太刀(鞘に模様)・球状の飾り物(団扇カ)	1
19	刀・太刀(鞘に模様)・小旗・球状の飾り物(団扇カ)	1
20	刀(鞘に模様)・太刀(朱鞘に模様)・棒	1
21	刀(鞘に模様)・傘	1
22	刀カ・太刀(鞘に模様)	1
23	太刀(鞘に模様)・団扇・旗指物(二本, 赤)	1
24	太刀(鞘に模様)・旗指物(二本, 赤)	1
25	太刀(鞘に模様)・団扇・長刀・旗指物(幟, 一本, 白)	1
26	太刀(鞘に模様)・団扇・旗指物(幟, 一本, 赤)	1
27	太刀(鞘に模様)・扇・長刀・旗指物(幟, 一本, 赤)	1
28	刀(金色)・太刀(朱鞘に模様)	1
29	刀(金色カ)・太刀(朱鞘に模様)・団扇	1
30	太刀(朱鞘に模様)・旗指物(幟, 一本, 赤)	1
31	太刀(朱鞘に模様)・旗指物(幟, 一本, 白)	1
32	太刀(朱鞘)・団扇・旗指物(二本, 赤・白)・笹	1
33	刀(朱鞘)	1
34	太刀カ(金色カ)	1
35	刀(金色)・太刀(金色)	1
36	刀(朱鞘カ)・太刀(金色)	1
37	刀(金色)・太刀(金色)・棒	1
38	太刀(金色)・旗指物(二本, 赤)	1
39	刀(金色)・太刀(金色)・旗指物(二本, 赤)	1
40	刀(金色)・太刀(金色)・団扇(腰に差す)	1
41	太刀(金色カ)・指物(一本, 赤)	1
42	刀(朱鞘)・太刀(金色)・旗指物(二本, 赤)	1
合計		63

荷(背負う)」が五件あるが(甲29)、乙本には見られない。この他、「熊手」(甲30)についても、甲本では四件あるが、乙本には見られない。甲本の熊手が描かれた場面は、松葉を搔く三人と、能舞台で演じられている「高砂」の尉の持ち物で、やや特殊ではあるが、甲本と乙本の比較とて言えば、やはり甲本の方が多様な生業と人物像を描いていると言えよう。

⑤ 刀・太刀の鞘

甲本・乙本共に、よく見ると刀・太刀の鞘に金色の模様が施されたり、鞘自体が金色や朱色に塗られている例があり、両者でかなり差があるため、別に表を作成した(表7)。数としても種類としても、乙本の方が甲本よりもずっと多い。

太刀や刀の黒い鞘に金色の模様を入れた例は甲本・乙本どちらにも見られるが(図104～107)、乙本の方が、線も入ったやや複雑な模様の例がある(図106)。鞘全体を金色に塗った例は、甲本は一例だけだが、乙本では二〇例があり、いずれも祇園祭礼の犬神人である(図108～110)。朱鞘は、甲本には全く見られないが、乙本には一一例が見られる(図111・112)。太刀、刀ともにあり、特に太刀には、朱鞘にさらに金の模様を入れたものが多い。大部分祇園祭礼の犬神人だが、それ以外の例も若干見られる(図112＝御霊神事)。

装飾的な表現や華やかな描写を好む乙本の特徴が表れていると言え、豊臣期ころと思われる乙本の時代的な特徴である可能性と、発注者および画家の嗜好の可能性、どちらも考えられるであろう。

まとめ

以上、甲本・乙本の人物データを比較して、とりあえず気の付いた違

いについて述べてみた。振り返ってみると、乙本は全体的に甲本よりも簡略化されており、またひとつの場面に、場面と関わる形で特定の種類の人物を集中させる傾向が見られる。生業の種類が少ないことや、僧侶を宗派別に描かないことなど、人物に個性が乏しく、男性の老人が全く見られないことや尼僧をほとんど描かないなど、偏りもかなり著しいものがある。

しかし、それは単純に甲本よりも質と量が下がったことを意味するのではなく、乙本独自の観点ないし嗜好から選択が行われた結果でもある。尼僧が排除される一方で着飾った女性が目立つし、振売や農民についても、野菜を扱った独自の場面が多く見られる。祭礼については、神輿が渡御する祭礼を二つ描き、さらに内裏でも賑やかな三稜杖の場面を描いており、色使いの点も含めて、全体を華やかに仕立てようとする意識が見られる。

これらの特徴は、発注者や絵師の個性に基づく面も多いと思われるが、時代差の問題もあると考えられる。たとえば、尼僧が少ないことは、後家尼の地位が下がって家長として表に出ることがなくなったためと見ることができ、絵画資料全体の問題としても、おそらく豊臣期のころからこのような現象が見られる。

兜に「変り兜」的なものが見られることや、幟旗など多様な指物が見られること、鬘では二つ折り鬘が多くなっていることなども、甲本よりも時代が下がった事による近世的な現象と見ることができよう。乙本が野菜に注目していることも、野菜の栽培や消費の変化が関係しているのかもしれない。

このような、社会の近世化がどのように表れているかという問題は、人物像のみを対象とした本稿で結論を出すことはできないが、乙本の年代を一五八〇年代、豊臣期ころではないかとした従来の推定と本稿での検討結果に特に違和感はなく、少なくとも大きな変更は必要ないと思わ

れる。

本稿は、人物データベースの情報に表れた甲本・乙本の違いについて、粗いレベルで例示を行なったものに過ぎず、詳細な比較とその意味の考察は、横断検索が可能な人物画像データベースというこの新たなツールを一助として、今後進められるべき課題である。そこで見出される様々な差は、人物以外の要素と合わせての甲本・乙本の総合的な考察に結びつくであろうし、さらに他の屏風との違いを検討する手掛かりともなるはずである。本データベースの公開を契機とした研究の進展が期待される。

【付記】

「歴博甲本人物データベース」「歴博乙本人物データベース」は、国立歴史民俗博物館ホームページ上の「データベースれきはく」および「WEBギャラリー」で利用できる（乙本のデータおよび甲本との横断検索は、二〇一七年一月から公開）。

屏風自体の画像も、甲本・乙本共に「WEBギャラリー」に収載されており、拡大機能も付いているため、人物の特徴を読み取ることができる程度の画像を閲覧することができる。

なお、本稿の分担については、甲本の表は大藪の作成であり、大藪二〇一四に掲載したものを、今回の乙本との対比に合わせて調整した。乙本の表は森下が作成した。表に対応する図と本文は、三者で協議しつつ、図は森下、本文は小島を中心に作成した。

註

(1) 複数のデータベースの横断検索については、人間文化研究機構の研究資源共有化システム（横断検索システム「HUNT」）を用いても可能であるが、画像表示の機能が異なるため、その表示に問題が生じる。

なお、連携研究「都市風俗と「職人」」においては、国文学研究資料館などが所蔵する板本の挿絵によって、「近世職人画像データベース」も作成しており、二〇一七年二月に公開されている。これについても、人間文化研究機構の横断検索システム「HUNT」によって横断検索が可能となる予定であり、「歴博甲本」「歴博乙本」との三者を横断した検索も、テキストベースでは可能となる。

(2) 衣服の入力語については、澤田和人氏よりご教示を得ている。

(3) このような宗派別の描き分けは、「七十一番職人歌合」とも共通するものがある。

(4) 宮崎一九八四は、赤熊、白熊、黒熊などを用いた兜糞や「引廻し」と呼ばれる兜の付属品を、「植毛兜」と呼ばれる変り兜の一種に先立つものと考えている。

(5) 『国史大辞典』（吉川弘文館）「指物」の項（鈴木敬三執筆）による。

(6) この他、甲本データベースの修正として、「甲（よろい）」は字義としては正しいのだが、一般的ではないため、「鎧」で統一した。

参考文献

（甲本については多数あるため、本稿に直接関わるものを挙げた）

大藪 海 二〇一四「洛中洛外図屏風歴博甲本人物データベース各項目の立項方法と入力語」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一八〇集

小島 道裕 二〇〇八「洛中洛外図屏風歴博甲本の成立と初期洛中洛外図屏風諸本」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一四五集

小島 道裕 二〇〇九「描かれた戦国の京都―洛中洛外図屏風を読む―」吉川弘文館

小島 道裕 二〇一六「洛中洛外図屏風―つづられた（京都）を読み解く―」吉川弘文館

近藤 好和 二〇一三「歴博甲本―洛中洛外図屏風―歴博甲本にみえる内裏とその行事」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一七八集

平野 恵 一九九二「洛中洛外図―風流踊の女装―」『明治大学大学院紀要文学篇』第二九集

藤原 重雄 二〇一五「洛中洛外図屏風の祖型を探る―京中図を描く視点―」『京を描く―洛中洛外図の時代―』京都文化博物館

宮崎 隆旨 一九八四『戦国変り兜』角川書店

宮田 公佳 二〇一四『画像・文字情報融合手段としての人物データベース構築』『国立歴史民俗博物館研究報告』第一八〇集

森下 佳菜 二〇一七「洛中洛外図屏風歴博乙本人物データベースの作成と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第二〇六集

〔「歴博乙本」についての文献〕

- 小林 忠 一九八七「新出の初期洛中洛外図屏風について」『国華』第一一〇五号
高橋 康夫 一九八八「洛中洛外―環境文化の中世史―」平凡社
斉藤 研一 一九九六「描かれた暖簾、看板、そして井戸―初期洛中洛外図屏風の
図像―」勝俣鎮夫編『中世人の生活世界』、山川出版社
澤田 和人 二〇〇四「鉢叩の装いと鉢叩の装い―服飾の記号性と造形―」『国立歴
史民俗博物館研究報告』第一〇九集
杉山 美絵 二〇〇九「描かれた禁裏の記憶―洛中洛外図屏風（歴博乙本）―」日高
薫・小島道裕編『歴史研究の最前線』二〇一〇美術資料に歴史を読む―漆
器と洛中洛外図―総研大日本歴史研究専攻・国立歴史民俗博物館
馬淵 美帆 二〇一〇「絵を用い、絵を創る 日本絵画における先行図様の利用」
ブリュッケ

小島道裕（国立歴史民俗博物館研究部）

森下佳菜（日本女子大学人間社会学部、

人間文化研究機構連携研究協力者）

大藪 海（お茶の水女子大学文教育学部、

国立歴史民俗博物館共同研究協力者）

（二〇一六年二月二七日受付、二〇一七年六月五日審査終了）

犬神人(弦召)

図6 乙本・祇園会の弦召



乙_右_3

図7 甲本・弦を売る弦召



甲_左_3

駕輿丁

図8 甲本・祇園会の駕輿丁



甲_右_2

図9 乙本・祇園会の駕輿丁



乙_右_2

図10 乙本・御霊会の駕輿丁



乙_左_6

公家

図11 甲本・束帯姿の公家



甲_右_5

図12 甲本・衣冠姿の公家



甲_右_5

図13 甲本・直衣姿の公家



甲_右_6

図14 乙本・衣冠姿の公家(赤)



乙_右_6

図15 乙本・衣冠姿の公家(黒)



乙_右_6

声聞師(大黒)

図16 乙本・内裏の三毬杖



乙_右_6

図17 乙本・同左



乙_右_6

尼僧

図18 甲本・尼寺の尼僧たち



甲_左_2

図21 乙本・尼寺の尼僧たち



乙_左_1

図19 甲本・尼僧(後家尼)がいる集団



甲_右_2

図20 甲本・尼僧(後家尼)がいる集団



甲_左_4

図22 乙本・尼僧(後家尼)がいない女性の集団



乙_右_3

図23 乙本・尼僧(後家尼)がいない女性の集団



乙_左_5

農民

図24 甲本・施肥



甲_右_5

図25 甲本・牛耕



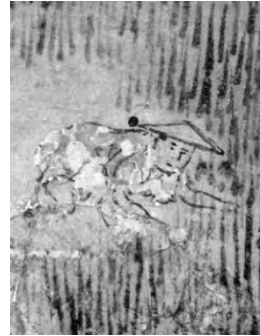
甲_右_4

図26 甲本・田打ち



甲_右_4

図27 甲本・麦刈り



甲_右_3

図28 甲本・灌漑



甲_右_3

図29 甲本・草取り



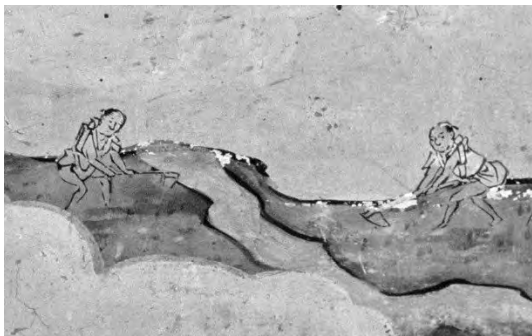
甲_右_3

図30 甲本・稲束を並べる



甲_左_6

図31 乙本・田おこし



乙_右_4

図32 乙本・稲刈り



乙_左_2

図33 乙本・稲束の運搬



乙_左_1,2

図34 乙本・田圃の畦道



乙_右_1

図35 乙本・畦道の牛



乙_左_1

図36 乙本・大根畑の頭上運搬



乙_右_5

振 売

図37 甲本・野菜売り



甲_左_2

図38 甲本・魚売り



甲_左_5

図39 甲本・油売り



甲_右_4

図40 甲本・かわらけ売り



甲_左_2

図41 乙本・野菜売り
(大根カ)



乙_右_6

図42 乙本・野菜売り
(人参カ)



乙_左_4

図43 乙本・野菜売り
(葉物野菜)



乙_左_6

図44 乙本・野菜売り
(大根)



乙_左_6

図45 乙本・大根の店頭販売



乙_右_3

【服装】 狩衣

図 46 甲本・公家(内裏)



甲_右_5

図 47 甲本・白張(内裏)



甲_右_5

図 48 甲本・能役者(地謡)



甲_右_1

図 49 甲本・禰宜方



甲_左_1

図 50 乙本・禰宜(松尾社)



乙_左_6

法衣

図 51 甲本・直襦型(百万遍)



甲_左_6

図 52 甲本・直襦型+僧帽(黒谷)



甲_右_4

図 53 甲本・直襦型+緋袈裟+鼻高履



甲_右_5

図 54 甲本・素絹型+袈裟(妙覚寺)



甲_右_3

図 55 乙本・直襦型(妙覚寺)



乙_右_5

図 56 乙本・直襦型(百万遍)



乙_左_5

図 57 乙本・直襦型



乙_右_3

図58 乙本・法衣+塗笠+覆面



乙_右_6

図59 甲本・法衣+塗笠+覆面



甲_左_2

図60 乙本・北野社の社僧



乙_左_3

禪

図61 甲本・鴨川



甲_右_1

図62 甲本・一条風呂



甲_左_6

図63 乙本・鴨川



乙_右_3

図64 乙本・一条風呂



乙_左_5

返股立

図65 甲本・肩衣袴の例



甲_右_4

図66 乙本・肩衣袴の例



乙_左_2

図67 乙本・小袖袴の例



乙_左_6

図68 乙本・小袖袴・脚絆の例



乙_左_6

図69 乙本・直垂型・結袷姿の例



乙_右_3

【被り物】 編笠(布を垂らす)

図70 甲本・編笠+布



甲_右_1

図71 甲本・編笠+布



甲_左_1

図72 甲本・編笠+布(風流踊)



甲_左_6

図73 乙本・布を垂らす(I)



乙_右_4

図74 乙本・布を垂らす(II)



乙_右_3

図75 乙本・赤い布を垂らす



乙_右_3

折烏帽子

図76 甲本・細川邸



甲_左_2

図77 甲本・観世能



甲_右_1

図78 甲本・かわらけ売り



甲_左_2

図79 乙本・細川邸



乙_左_2

図80 乙本・声聞師(大黒)



乙_右_5

図81 乙本・犬神人



乙_右_2

赤熊

図82 甲本・赤熊



甲_左_6

図83 乙本・兜巾カ+赤熊



乙_左_5

図84 乙本・帽子+赤熊



乙_左_6

図85 乙本・黒熊カ



乙_左_6

兜

図86 甲本・兜



甲_右_1

図87 甲本・兜+兜蓑



甲_右_1

図88 乙本・兜(I)



乙_右_2

図89 乙本・兜(II)



乙_右_3

図90 乙本・兜(III)



乙_右_3

図91 乙本・兜(IV)



乙_右_3

【髪型】

二つ折り髷

図92 乙本・二つ折り髷



乙_右_6

【髭】

顎髭

図93 乙本・顎髭



乙_左_5

【持ち物】

図94 乙本・三毬杖



乙_右_6

図95 乙本・御霊会



乙_左_5

指物

図96 甲本・撓



甲_右_1

図97 甲本・撓



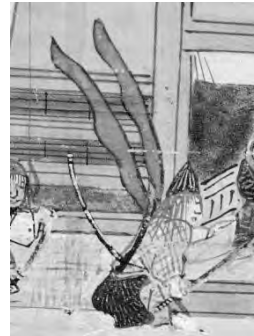
甲_右_3

図98 乙本・撓



乙_右_2

図99 乙本・撓



乙_左_6

図100 乙本・幟



乙_右_5

図101 乙本・幟



乙_左_6

図102 乙本・羽根状の指物



乙_左_6

図103 乙本・招の指物



乙_左_6

刀と太刀の鞘

図104 甲本・刀(鞘に模様)
太刀(鞘に模様)



甲_右_1

図105 甲本・刀(鞘に模様)



甲_右_6

図106 乙本・刀(鞘に模様)
太刀(鞘に模様)



乙_右_3

図107 乙本・刀(鞘に模様)



乙_左_3

図108 甲本・刀(金色)



甲_右_1

図109 乙本・太刀(金色)



乙_右_3

図110 乙本・刀(金色)



乙_右_3

図111 乙本・刀(朱鞘)
太刀(朱鞘に模様)



乙_右_3

図112 乙本・太刀(朱鞘)



乙_左_5

Use of the Character Database for Comparison of Rekihaku A and B Versions of Folding Screens of Scenes in and around Kyoto

KOJIMA Michihiro, MORISHITA Kana, OYABU Umi

A database has been compiled of all the figures depicted in two sets of early folding screens of Scenes in and around Kyoto (Rakuchū-Rakugai-Zu) in the possession of the National Museum of Japanese History, Rekihaku A and B Versions (containing 1,426 and 1,172 persons, respectively), and prepared for federated search. Using this database, this paper makes a quantitative comparison of the two paintings to present their differences while focusing on Version B, which remains unknown in many aspects.

In general, depiction is more simplified in Version B than in Version A. Version B tends to bring certain types of people together in a scene while showing the relationship between these characters and the scene. Meanwhile, the painting as a whole lacks the variety of characters. Version B does not describe a wide variety of occupations or distinguish priests by their sects. Moreover, the selection of characters is unbalanced. It contains no old men and only a few priestesses.

However, this does not mean that Version B is of lower quality and quantity than Version A. This is merely a result of selection depending on the specific perspective and preference of the Version. While including only a few priestesses, Version B contains many women in beautiful attire as well as many unique scenes depicting vegetables handled by street vendors and farmers. Version B also portrays two festivals with portable shrines carried around as well as the lively scene of Sagichō Festival held at the Imperial Court. These features imply the intention to adorn the whole scene.

These differences can be attributed to the preferences of the clients and painters but also ascribed to the difference of times. The reason why only a few priestesses are included in the picture seems to be because they lowered their profile as representatives of their families after their social status had dropped. The early-modern phenomena described in Version B, such as the emergence of decorative helmets, the wide variety of vertical flags and banners, and the spread of the *chonmage* knot hair style, imply that it was painted later than Version A. With regard to the date of the painting, this analysis finds no evidence against our assumption that Version B dates back to the 1580s under the rule of Toyotomi Hideyoshi.

Key words: folding screens of scenes in and around Kyoto (Rakuchū-Rakugai-Zu), Rekihaku A version, Rekihaku B version, pictures of figures, database
